

春先に咲き誇る、県の花レンゲ。群がるミツバチも含めた光景は、かつての岐阜を知る人たちにとっては「心象風景」の一つになっているはずだ。それもそのはず。岐阜市周辺は近代養蜂発祥の地と呼ばれ、現在も複数の養蜂業者が本社を構える全国屈指の集積地だ。なぜ岐阜が先進地となったのか。その歴史をひもとくとともに、安価な輸入品が市場を席巻する中で、岐阜から事業モデルの転換に挑む現在の養蜂業に迫った。

(富樫一平)

西洋から養蜂技術が国内に伝わり、広まった明治中期。岐阜市本町で、代々材木屋を営んでいた秋田屋本店の六代目中村源次郎の元に、西洋ミツバチを飼育する巣箱の製作依頼が寄せられた。良質な秋田杉で巣箱を作った縁をきっかけに、中村は1887年、社内に養蜂部を立ち上げた。

先駆者は中村だけではなかった。羽島郡岐南町出身の渡辺寛は1900年に渡辺養蜂場を創業。養蜂を始めた。養蜂の専門化に取り組むなど、日本近代養蜂の父の一人に数えられる人物だ。2人が通ったのが名和昆虫研究所。昆虫学者の名和靖にミツバチの増殖や品種改良を相談するだけでなく、器具を試作したり、飼育の技術論を披露し合っ

岐阜市周辺、養蜂業の集積地

ギョ
? **そもそもなぜ?** ?



巣箱の板一面に密集する花粉交配用のミツバチの状態をチェックする作業員。各務原市川島町、アピ川島養蜂場

先駆者2人「採蜜の礎」

た。共に研さんを積みながら、日本の近代養蜂の礎を確立していった。

その中で生み出された岐阜発の近代養蜂技術には、南北に長い日本列島を移動しながら採蜜をしていく転

飼がある。渡辺が最初に提言したとされ、2月の九州を皮切りに長野や北海道を転々としていく。旬の花を追える上、夏場の酷暑期を北海道や長野など涼しい場所へ移動させるため、採蜜効率を上げることができる。

岐阜は地理的に中央に位置し、良質な蜜が採れるレンゲ畑が広がっていたため、県外の養蜂家もこぞって立ち寄った。その養蜂家から蜜を買い取る問屋も自然と増えていった。

戦後間もない頃には、県内の養蜂家が約千軒を数えるほど隆盛期を迎えた。細菌感染で幼虫が腐るフソ病が大流行した50年代には、感染したミツバチの焼却処分をしなければならなかった。処分場所となった良

川河畔の近くには、犠牲となったミツバチの供養碑が立っており、当時の悲しい歴史を伝えている。養蜂業に事業転換した秋田屋本店の現社長で、県養蜂組合連合会長を務める九代目中村源次郎さん(69)は「養蜂家にとってミツバチは家族のようなもの。いたたまれない気持ちだったはず」とおもんばかった。

だが蜂蜜を採取するだけの養蜂業は、その後安価な輸入品の台頭もあり、衰退を力説するのは、農家向け交配用ミツバチの国内シェア約3割を占める、養蜂業のアピ川島養蜂場の中野剛さん(49)。ミツバチが触媒となって受粉する植物は17万種あるとされる。同社のミツバチはイチゴやスイカ、メロンなど食生活に欠かせない農作物の花粉交配を担う。「蜂蜜など副産物に目が行きがちだが、ポリネーションは自然の摂理。重要な役割の一端を担えることは誇り」と胸を張る。



ミツバチの働きに感謝をささげる石碑の前で、養蜂業の盛衰を語る九代目中村源次郎さん。岐阜市鏡岩、蜜蜂之碑

の一途をたどる。農林水産省の調査によると、国内消費量に占める輸入品の割合は現在9割を超えている。県内でもレンゲの作付け面積が減るなど、養蜂業を巡る環境は年々厳しくなり、養蜂家の数も約100軒前後にまで減った。

「これからの時代はポリネーション(花粉交配)。ミツバチが日本の農業を支える。養蜂業の新たな在り方だ」と使命感を口にした。